

## 宮崎汎会員が見た世界の旅・第2部第4話

### レオナルド・ダ・ヴィンチ

ルネッサンスを代表する万能の天才芸術家。フィレンツェのヴィンチ村に生まれ（1452年～1519年）、フィレンツェのヴェロッキオの工房で修行し、マエストロ（親方）の資格をえる。その後故郷を去りミラノの王ロドヴィコ・スフォルツァに身を寄せた、スフォルツァ城（通称ミラノ城）の設計にも携わったといわれている。レオナルド・ダ・ヴィンチが王に差し出した自薦状は単なる画家ではなく軍事技術はじめ様々な自身の持つ能力を細かに列挙している。



レオナルド・ダ・ヴィンチが設計に関わった  
スフォルツァ城＝ミラノ城



ミラノのサンタマリアデッレグラツィエ修道院  
最後の晩餐はこの食堂の壁に描かれている 1982年



修復中の最後の晩餐 （1982年）

ミラノには17年もの間滞在し、画家として「最後の晩餐」など傑作をものにしている。フランスの侵攻によりミラノからヴェネチアへ、そしてフィレンツェに帰ったが、その後ローマ、バチカンに赴いた。

ルネッサンス期の画家たちは、専門の絵画制作にとどまらず彫刻家、建築家、詩人、科学者として多様な活躍をしているが、その中でもとりわけレオナルドは抜きんでた才能を示している。

ルネッサンスの発祥の地フィレンツェのウフィツィ美術館の絵画で最も人が溢れている人気絵画は意外にもボッティチエッリの“ヴィーナスの誕生”と”プリマベラ＝春“である。同美術館のレオナルド・ダ・ヴィンチの受胎告知も有名だが人だかりするほどではない。一方パリのルーブル博物館では終日最も人で混みあっているのはレオナルド・ダ・ヴィンチの世界的な名画”モナリザ“であ

る。想像するに没し葬られているのが故郷イタリアでなくフランスのせいなのかと素人目には映る。



受胎告知　　フィレンツェ　ウフィツィ美術館



パリ　ルーブル美術館の”モナリザ“の前は終日人だかりがすごい

最晩年レオナルド・ダ・ヴィンチはフランス王フランソワ一世に迎えられ、ロール河畔アンボアーズ城近くのクロ・リュセ館で3年間を過ごし、ここで67歳の生涯をとじ、アンボアーズ城の敷地にある”サンテュベール礼拝堂“に永眠している。

中世イタリアの功成り名を遂げた著名人たちの多くは、フィレンツェのサンタ・クロッチェ教会に葬られたいという願望があり、ミケランジェロ、ガリレオ・ガリレイ、音楽家のロッシーニ、ダンテ、マキャベリなど著名人たちの多くがここに眠っている。

訪れる機会がなくて目にしてないが、イタリアのトリノの国立図書館蔵のセピア色の自画像は写真で見ると、その容貌は知性に溢れ、厳しい眼差しに強い意志の力を感じる。不思議に感じたのは、ダ・ヴィンチは現在に残っている作品自体が少ないせいなのかと思われるが、レオナルド・ダ・ヴィン



クロ・リュセ館で生涯を閉じた



チが生まれたイタリアではミケランジェロやラファエロ、さらには国外逃亡したカラヴァッジオ等の  
の絵画・彫刻が目につき名前もよく耳にした。生まれ故郷イタリアでのレオナルド・ダ・ヴィンチ  
は人気の点でどうなのかと感じた。 (2016年)

以下はレオナルド・ダ・ヴィンチの絵画をカメラに収めたものである



キリストの洗礼・ウフィツィ



三王礼拝・ウフィツィ



岩窟の聖母 ルーブル



製アンナと聖母子と子羊・ルーブル

聖ヨハネ・ルーブル

聖ヒエロニムス・ヴァチカン

ブノワの聖母 エルミターージュ

リッタの聖母 エルミターージュ

余談) キプロスを訪れたとき、山上にあるレフカラ村へいった。ここはヴェネチアから伝わった刺繍技術が今も盛んで、ここではレースといえば無論全て手編みで、見事な製品は当然のことながら求めると高価である。

ガイドから中世の頃からの手編みのレースは、現在伝統工芸品として世界から高い評価を得ている。彼のレオナルド・ダ・ヴィンチもここレフカラ村にやってきてレースを購入した。そのレースはミラノの大聖堂に飾るため持ち帰ったそうだ。レオナルド・ダ・ヴィンチの絵の中に買い求めた



レースの様子が書き込まれているとの事である。



キプロスの山上にあるレフカラ村